



新編

新

涼

書

話

完

又下

特別
5
6472





新涼夜話



袂の露覚なる一嵐のゆゑ。風静ま
 紅の夢を遺れ。予が草庵に臥
 うるも日あはぬ。眼も及ぬ四方乃
 春のうらさ。耳に傳ふる山ほくおはと。心に
 一坊を憶くつら。尚附合ハ恙なきなり
 と。露の涙は外をそそぐ。うら人と
 白を化す。月もさきも憶く海

きりば。いふ女作のおぢい。このうらぶらぶ。まじりた
一途をたづねるといふ。おぢい。おぢい
又月軍のまぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい

おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい

陽の人はおぢい

は白神妙の作もあつた。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい
おぢい。おぢい。おぢい。おぢい。おぢい

のり子風流を説。新巻を―奇が夜―
句作縦横も及ぶとも。時々くはふよ風流の
そむ。新巻子やれくうさのふたうら。一氣中
終く終きと怪び。もははるまゝ終るの
又くく。予又云新巻子みづくはふは坊々。
風流のよあやまのいふさだ。されど天然の
方をきくめく。曲くは坊々す。又又
あやまのよさか。風流のよあ縦横をねば

終りほくく。又とる。奇よねりむも又
くく。そりほくく。うくく。
うくく。附合の風流をさ。うくく。
はらう。さう。新巻の坊々。
あやの百負。哭く。止り。物か。
な。うくく。新巻の坊々。
―新巻夜話―
ら卯秋
涼介





心なき星乃多さよ天の川	涼
月をかし移る山乃露一	嵐
管燕も女郎を祀響くけ	唄
汐波の魚を丸うしり	嵐
善法坊一肩うき中持く来	唄
作向う急少曳船の旅	嵐
りしも色移を仕ぬ時分	唄
冬のお撲ハ二人ぼり	嵐

亥の子もたゞ詠の遊の五

篇

果ハ杖布子其ノ投鞘

杖

牧物ノ幾ハも不二ノ道ハは

篇

休ノ人ニシテ其ノ心ハ

杖

建立の内ハ仁王も言ま

篇

及古一及古のやうな

杖

米市の端ノ詠ガ杖ノ

杖

身ガ子あさきる祖父の

杖

白の地ハ月ノ如クも

篇

温泉乃山陰ハ康子三味

杖

継母も実ノ麻セ如ク

篇

糸也ノ縷子ノ梅ノ糸

杖

糸ノ打振ノ杖ハを汲ノ

杖

枯葉の多い三月乃塵

杖

猿引の鼻ノ少キノ杖

杖

杖ノ響ラシキ人の糸

杖

雲立ハ胸も押一寸晴あうと
帛

舟を舁せハ淀の糸登
帛

大谷の序懐ハ何も亦
帛

御^キ座の試も栴^チ_子吐^ク
帛

摺^クびとる^ル穢^チのさがら^キ
帛

任持^チ淵^チ山を^アバ^キ家
帛

漬^ル蓄^ルれ^ル唐樹^チの通^チ漏^チ也
帛

細^ク多^ク故^ク日^チ天^チ文^チ子^チ
帛

子代リ一月^チ婆^チくを^キま^キく^ル
帛

寿^チ人^チと^チ知^チラ^キセ^キを^キ順^チく^ル
帛

盃^チ七^チ切^チ一^チ字^チの^チ影^チ子^チ
帛

網^チ子^チ実^チの^チ入^チ凡^チく^ル
帛

帷^チ子^チも^チ乃^チ後^チ乃^チ恨^チを^キ思^チく^ル
帛

法^チ身^チ乃^チ後^チ乃^チ大^チ勢^チの^チあ^キ
帛

引^チの^チ漕^チも^チ二^チ掻^チく^ル
帛

修^チ身^チを^キ修^チく^ル
帛

織もの名取の遊屏風

屏

お福をさすねて今又友近

屏

表奥の羊紙洗ひをあらふ

屏

日向、ぼろも時をさす家

屏

昔ころうらうらとあそびてあそびてあそび

屏

牛房のめよ瘦るをひく

屏

浮、麻の物さハる月も成

屏

又日陽のあそび小遊

屏

茶の枝陶子あそびけり

屏

お喜の様るねる乃重

屏

一句立自序

偶吸露庵の里合の表

乃あゆむもまことに二星のお表

六、再び廿表の困りねり

⑤

昂き乃物さうく板んときるに
かこく産まの許ある白も乃望ふく
虫の信家とあふむかおあうれハ
にありめく一白まときまに彼女話
よ決所の満耳人情の怪き新奇
をこのうる承りく言紙坊んく紙希而已

一氣條

一氣附句

洗濯は綾をかを付く者
女房作つて母一設熟

経冊も葉くまへて去て重
体への多ゆは戸の親ハ

箱伏の後の風呂さへあや解く
重くも奏の各思ふ故くあて

天恵乃くちのつさうひ

きうハ新車の極ニ見ユ者
封切ユウユウモリ月揚

三月の二日ハ餅又更ユ重
留ミ子賦一ノ原守柳少本

世居ト幕の目利一ノ葉心
女を連中言さ津ウミ

擧揚終ニ委る令棋
擧メを仕事ニ停ノ深そ

掃海ノ西瓜の糸蕾推又ナ
眉毛ウミユミハ本後

本馬ウミユミユノ換ニ晴ユナ
炎ハ後ユノ教を忘せる

七夕一羊を貸ユノ世実ハ
通の尻ハ信ユ留ウナ

新お状をマヤ子物ユ止ニ
移モ終ウノあ世ハユ

附ケるたノ曲ユるのあハ
初モト夏笠形子買ユ始

餅ツキヨクモ欠ユ重江中
松モ鹿のウチハ足あユ

朝 一ハ冬 一ハ花の香
露のしらハ種持て舞

後 一ハ石ハ心りれ
報 継承の天恵持て居

業 時子婦之ハ智も心乃 主
睦の海く己を形せる

硝子 一ハ少く破くハ林 一ハ
屏風 一ハ少く破くハ林 一ハ

絵 賣ハ種の一を種と種と
雲 換たる乃種、小使

表 種又文る事ハ種ハ如
一ハ是を紙子の内く歩如也

冬 のまの種も柳ハ表とあり
己さつてきて高中にはあり

何 以てもある 種の一を
鳴る時京の云葉子成る

表 生ハ心の心乃 附く亦
柳ハ心いもの吹折る

目 一ハ心と三つ子の種心きり
一及 罌くく心のうりて裁

産
少終く 親うく 出る 産とも
弓遠く 女ハあ方く 習シ

仲人ハ急く 何を 産つと 本後
仲人ハ急く 何を 産つと 本後

大文字の 難中 産又 産みつる
宗 産 産 産 産 産 産 産

村の名も 松一本 産又 産つる
産 産 産 産 産 産 産 産

二日 産 産 産 産 産 産 産 産
産 産 産 産 産 産 産 産

今判又 産 産 産 産 産 産 産 産
産 産 産 産 産 産 産 産

去 産 産 産 産 産 産 産 産
産 産 産 産 産 産 産 産

一幅の 産 産 産 産 産 産 産 産
産 産 産 産 産 産 産 産

産 産 産 産 産 産 産 産
産 産 産 産 産 産 産 産

六方 産 産 産 産 産 産 産 産
産 産 産 産 産 産 産 産

鍋口、何れに申す、念入る
八坂、襦乃、是の編、笠

農業を全くとる、徳有
鳥、帽子、又、平、と、雨、乞

壺、致、ハ、言、茶、を、ゆ、の、ま、や、生、疎

月、是、に、茶、売、の、を、活、の、む、の、の、
目、見、へ、の、欠、と、言、限、と、及、に

百、生、も、天、恵、あ、ま、と、控、へ、と
萩、を、む、は、の、枝、折、た、
道、を、四、つ、は、年、あ、の、う、に

紋、を、正、付、と、古、着、屋、へ、寄
大、小、を、喰、り、に、並、ハ、流、石、之

糸、染、と、着、れ、ぬ、事、に、紅、花、畑
道、を、四、つ、は、年、あ、の、う、に

古、着、と、ハ、江、戸、も、小、さ、な、は、り、と、
髪、の、髻、古、子、天、恵、あ、の、う、に

土、壺、と、日、御、へ、寄、る、事、の、一、と、
校、を、お、ち、り、ハ、下、り、や、う、な、う、に

飛、騨、の、湯、と、附、の、礼、集、と、
被、崎、と、傘、と、と、糸

一石文り連歌一抄
純母もだまらうとある、まの造り

市井の賢斗を大いふと
早合念の口上は破れ

藝論も天恵ありの春の来
外科は誤る世論乃女

風呂吹はさくさくを撰
南力九は茶忘る合ひは

結所は弱はさかぬ麻の
糸の湯彼志る裏門の来

湖の日和は新魚も能上
在ひて恵うこは持てる

秋乃日ハ夢遊の春も
さくさく下のはしりて人

実乃ゆき形、乃ちハ
友の道者う初瓶九春

こ交のハ還俗もせぬ
さる聖は位はを忘れる

草物も喰うも侍う
能くは度友ハ且方の

遊山子の皇を下とえつて意
秋く作つとあまの仙

水味はまゝなるやうにひさかた
櫛を交へて女のつとむ

お智をまゝに居るの御臺は猿マ系
粽へ減らば松の葉は

七夕へ伊達を貸のち方の月
踊ら強く一ツ歌をき

お清ハ天の香を味方かき
をを切らして咽のふえ

本地撰の層うら秋七歌を拂
片庭指くもせり世尻

大小を過急のやうに接しり
系乃 炎之ハあま湯かぬ

大和路ハ六歌の是も念ふ入
火繩を生かしてまも松村

所覚は仕飛ゆまゝの足らん
扇の波と流るる遠小

菘入もあまのうら雨の中
草鞋く素をききうきてお

矢よりのふ 菡 香く 堯 押一 志
後子 立に あり 於 一 書

未人の 拵ひ 仲 乃 一 月 一 口
菊の 足 出 又 物 足 一 行

弱状の中 子 八 尺の 幸 七 あり
あふ 所 ぬ 拵の 乞 食 世 出 長

板の本 一 一 葉の 香 小 秋の 丹
摺 返 一 あり 白の 形 石

片 一 あり 桶の 桶 一 あり
片 一 あり 形 一 あり 肉 一 あり 痛 一 あり

あ 方 の 名 一 晴 一 一 候 一 あり
二 階 一 一 あり 熱 一 候 一 あり 中

信 病 一 一 念 仏 娘 一 一 あり 一 あり
皆 一 あり 一 あり 仕 一 あり 一 あり 候

拵 一 あり 小 伎 の 名 一 あり 一 あり 一 あり
拵 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり 成

幸 人 の 名 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり
幸 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり

ひ 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり
細 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり 一 あり

燈火の消く廣る月の中
枯るをく成く信病

正しく山も丹波ハ雪乃子
思ハ坊子成夏の日帰リ

ぬきう終くと火種はうけ初時
誕生日を元紙く立ッ

ふ十ほどあちくの屋敷へきく有
指之換なふくねむ本也リ

青月よ松の上も定らん
喜ハ紙ハ下戸の紙子入

暑波をの徒ら眠さころこ
中く事き一飯屋の隠家

時ふを近く曇るき原
茶の茶を冷くゆふくと又まへる

名登へあへ元る乙子
菽入の土産は脊中又きく者

廻板よたふ好一横ひ門の
聲よほふく口う廣る

消炭乃十能へ息うけく
指産入くつらと仕せり

大夏のふへ 俯くはよふ
雲をわたり 結く高摩るなり

夏の吹く爪と成りもあき
櫛の又もふんちりも 白

岸は清くぬやよ 三首の月
白く流る牛の洗足

老僧へ小僧の色相を結く
空む瓢乃形は 即ちの

うけを誰とけし 世なる
呵く病を 秋へ 居 雲

言候を 誇く 出終ハ 睡く
夏の 扉ハ 扇を 扇る なる

善縁の 自悟を 月と 交く 並
侍子 茶を 煮く 湯と 也

振附と 神の 留め 物 有り 並
寺の 子供を 帰す 利 刀

さ由 附く 事 喜の 音と
非 子成 成り 也 後 帯

扉 扉ハ 糸 乃 黒さの 路り 心
解き 中 子 競る 足 君

驚のあやうは深世記の
道利は信くさうい掛あ

白笛ハ梅の福系麻一り
仕也火権を猫の足送る

今仏も煮一立りぬ日
終りるむさく終を拭る

名仏も飯名つけきふ又字てま
の流の肩ハ押合あく君

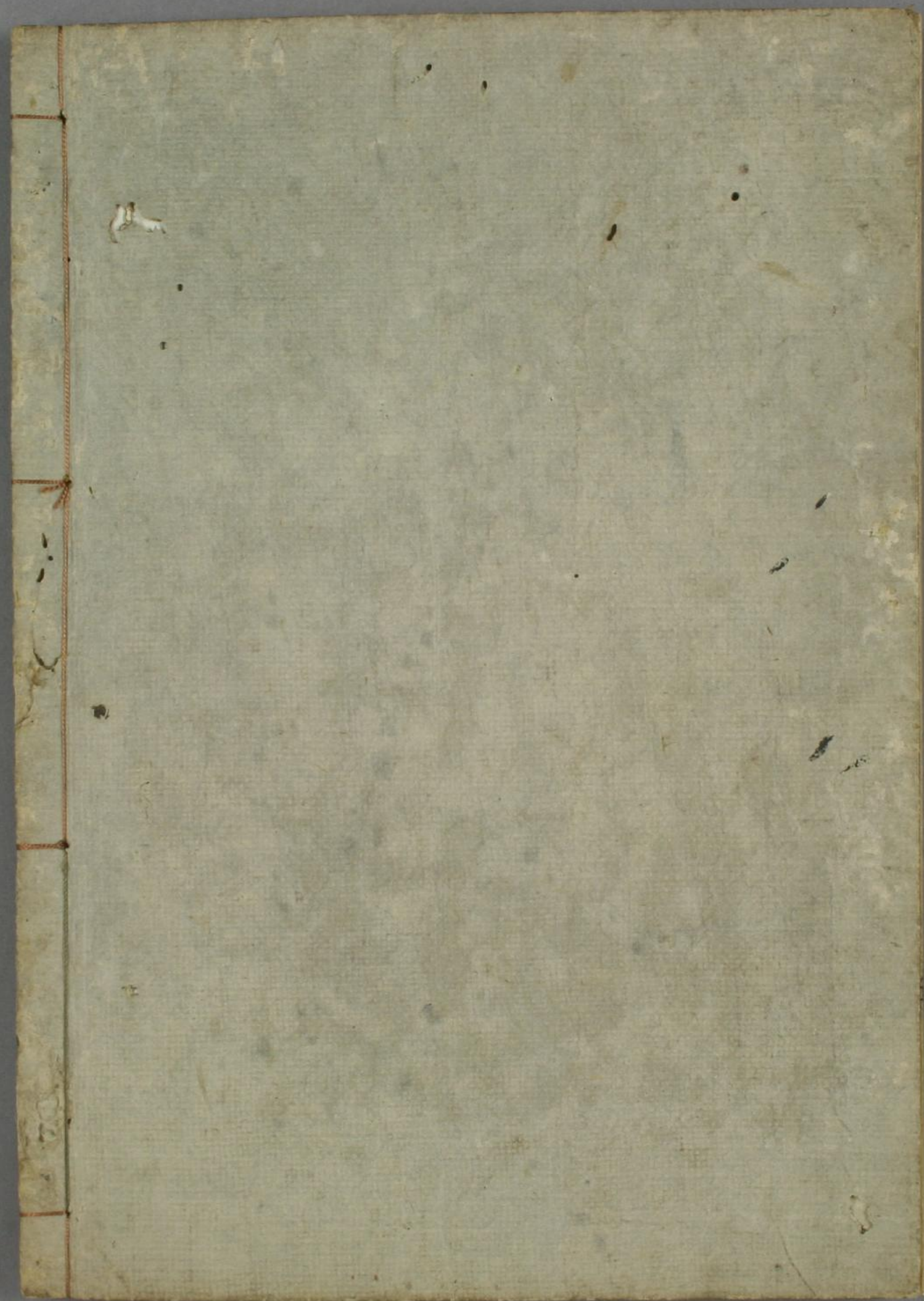
松をえる思葉もゆ来寸降き
後うくくくく悔る八丁

昭和十一年三月 善三

書林

江戸通油町

須原太兵衛



涼幣
考訂
一鼠作

新涼友話

文昌閣

